

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年四月十五日發行（毎月一回・十五日發行）

（通第九十七号）

目

「大事」といふこと……………花田正夫…（1）

耳と目……………榑原徳草…（6）

次

わが人生を憶ふ……………松村繁雄…（10）

慈光

第九卷 第四號

「一大事」といふこと

花田正夫

西哲の言葉に『人生を譬へれば、溜りに水に棲む小魚である。その中で、食を争ひ、住を競うてゐるが、右に行つても、左に走つても壁につきあたる。前にも後にも、上にも下にも、出やうのない障碍がある。ザリ／＼と照りつける太陽の光熱にやがて溜り水は濁いて了ふ、そして一切は死滅せねばならない。そのことを自覚した魚が、涸渇することのない大河に帰りたいと真剣に願ひ求める。然しそれは全く不可能事である。然し絶望であつてもどうしてもその大河を求めずには居られない。その願ひが宗教を求めめる心である』とある。

成る程、私共の人生は文字通り八方塞り、四方八方に突きあたつて、出やうのない生活である。五十年、百年の人生に閉ぢこめられて、出やうのない姿である。

更に、或哲人は『洞窟の譬喩』を説いて、人生は牢獄であるとのべてゐる。その譬へによると『暗い洞窟の中にし

ばられて、身動きの出来ない囚人、その背後から光が射して居る。然しその囚人は光の方を見ることは出来ない、縛られて振り向くことが出来ない。この囚人に見えるのは、光によつて照されて前方の壁にうつる自分の暗い影だけである。自分が動くとき暗い影も動く。それしか見えない囚人の生活である』と述べてゐる。

この譬では『俺が、俺が』の暗い洞窟の中で、自己中心の判断、よいといふのも、わるいといふのも皆自己本位、真の正しい知慧、明るく広い世界からは遮断せられて、我執我慢にしばられた身動きならぬ姿を教へられる。

『残水の小魚』、『洞窟の囚人』。それが我身であると知らされるところに求道心が芽生える。然し『夢中夢をさどらず』、『狂人狂を知らず』で、残水の絶望も、洞窟の暗黒も自覚出来ないで、食と住を争ひ、疑心暗鬼に恐れおののく。そして性こりもなく我慢一つで何処々々までも押し

通してゐる。この人生の真相を知り尽くされ、その底の底まで徹見される仏は『悲心切々、驚いて火宅に入り』給ふのである。そこに仏陀御出世の一大事因縁がある。

法華経方便品に

『諸仏世尊は唯一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふ。諸仏世尊は衆生をして仏智見を開かしめ、清浄を得しめんと欲するが故に世に出現し給ふ。衆生に仏の智見を示さんと欲するが故に世に出現し給ふ。衆生をして仏智見を悟らしめんと欲するが故に出現し給ふ。……』

舍利弗、是を諸仏の一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふと為す』とある。

さて『仏智見を、開き、示し、悟らしめる』そこに諸仏の出世の一大事因縁のましますことを知らされるが、仏智のひかりによつて、『小魚、囚人』のわれが照し出されて来るのである。又照し出され始めるが故に、求道心に大事がかかるのである。

蓮如上人は『今度の我等が一大事の後生』とか『一大事といふは是れなり』とか『今度の一大事の報土の往生を遂

ぐべきものなり』と、繰り返して、繰り返して、生死事大を提唱して下さつてゐる。諸仏出世の一大事因縁に催されての長時不斷に火と燃える上人の御親切の發露である。その悲心に覺まされて、現に毒矢が身に刺されてゐると気付かされると、ダツとしては居られないが、さうなれない。そこに『如何に宿善まかせとは云ひながら、迷懷のころしばらくもやむことなし』とか、或は口中の病になられた時、『ア、ア、』と仰言るので、御病痛かとおたづねすると『人々の信のないのが歎かましい』とも述べられ、上人の悲心のただならぬのに驚く。その慈育を蒙つた赤尾の道宗が『後生の一大事、一期をかぎり油断あるまじきこと』と誌してゐるのもむべなるかなである。

さて仏智が我等のうちに滲透して、その催しを蒙るについで、その様相は千変万化、あれこれと云ふことは出来ない。全く其人々々の業報を縁として時節到来して信心開發せられる。

先づ法然上人の上においてそれを見よう。父君の殺害を縁として、仇討の道の非を教へられ、恩讐一如の大道を求めて叡山に登られ、修学修行実在に卅五年。御年四十三歳の春に及ばれて

『法は深妙なりとも我が機すべて及び難し。』

經典を披覽するに、其智、最も愚なり。

矇々たる憂には闇に道に迷ふが如し。

忙々たる恨には渡に船を失ふが如し。

黒谷の報恩蔵に入て一切経を披見すること、既に五遍に及びぬ。然れども出離の要法をさとり得ず。愁情いよいよ深く、学意ますく盛んなり。

幼き盛り、分別盛りの御歳で、一大疑團にぶちあたられたのである。そこで『後生が一大事』となられたのである。

『朝、朝には定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕、夕には出離の縁の缺けたることを悲歎す』

で、沈む夕陽を引きとめる何物もない如くに、万酔の恨みを呑んで亡び去るほかにない身、生涯の辛苦が水泡に帰する身が照し出された。

その一大事の時刻に、善因たちまちに熟し、宿縁とみにあらはれて、善導大師の疏文『一心専念弥陀名号……順彼仏願故』の一文に至つて、善導大師の文意がひらかれたのであつた。

一点理想の光明を前方に認めて、専心にその光を求めて行く。然し行けば行くほどその光は遠ざかつて、遂に根も精もつきはてて、一步も半歩も進めなくなり、それかと云つて、そこへ坐りこむことも出来ない。そして藻擱けば藻擱く程沈んで行く底なしの沼。へたくとそこに崩折れた

まんまが、何時の間にか力強い仏願の御手に支へられてゐたのである。それは不思議と申すほかはない。

池山栄吉先生は明治卅四年頃独乙に留學され、勞働問題を研究、日本最初の提唱者となられた。然し当時の日本に耳を傾ける者はなかつた。そのうちに事業の失敗やら、病氣やらで岡山の高等学校の独乙語教授となられた。そこに我武者羅に進まれた自己の内省を進められ、自分の望んでやまぬものは名譽であつたと気付かれた。然し名譽に値する徳が内であればそれもよいが、悲哉虚仮不実が性である。して見れば、あやまつて名譽を得たにしてもそれは虚名である、不義の富貴である。さうしたことが知れた時、今迄あると思つた信仰も崩れ、明日への生きる希望さへ失つて了つた。明日への希望の持てない生活、それは堪えられない奈落の苦悶である、と述懐せられてゐる。その時、一大事となられたのである。

四畳半の書齋で、机の前に坐つてゐることも出来ないで四つ匍ひになられて『あゝ信仰が欲しい！』と思ひつめられた刹那に『親鸞におきてはただ念仏して』の一句が、ヒョッコリ胸に浮び、『あゝさうか、聖人もただ念仏であつたか、ぢや池山も』と南無阿弥陀仏、々々、々々、となられたのである。同時に、暗い、はかない胸に、明るい、たのもしさが満ち渡つた。

近角常観先生は、清沢満之先生を中心として白河覚を組織されて、宗門改革運動に挺身せられた。初めは宗団人が眠つてゐる、宗門が墮落してゐるといふので、学問はもとよりのこと一切を犠牲にしても改革したいといふ一念にふるい立たれたのであるが、自分の働きが認められないばかりでなく同志の間に紛争がおこつた。右をなだめ左をよくするといふ風に専心努力されたけれど一向に人は理解してくれぬ。そこで淋しい、不平不満の心になつた。さてさうなつて見ると、自分のやつてゐる善は偽りであつた虚仮であつたと気付かれ、今迄他人が悪いとばかり思つてゐたのが、今度は自分が悪い／＼となられた。

そこで何でもよくならねばならぬ／＼となられたのであるが、その自分をどうすることも出来ず、遂には狂人同様の大煩悶におちこまれた。

最後に、自分は駄目である。どうしてもよくなれない、只今となつては、この駄目な者を捨てぬ、呆れぬといふ方はないであらうかと、そのことひとつに心が向けられた。この時のことを『自力回向』の状態であつたと仰言つてゐる。その頃、友人の慰めも、親兄弟の励ましも一向に効き目がない。座敷を爪先立ててキリ／＼舞ひして居られるといふ始末で、そのためか大病になられ、心身共に大苦悶がずつと続き、幸に病が漸次恢復せられて、人力車で通院出来るまでになられた日、フト澄み渡つた大空を仰がれたの

がきっかけになつて、広大無辺な仏のまことを感得なされて、豆粒程の小さな心であたのが大いにひらけて、仏の大願海に帰入せられたのであつた。

信友北岡行男さんの御父さんは、吉野で材木商をして居られたが、五十四才の時、当時京大医学部に居られた行男さんを訪れ、池山先生と三人で竜安寺の紅葉狩りに出掛けられた。その途中でハラハラと散る紅葉を眺められて、独り言のやうに『北岡さん、今に我々もこのやうに散るのですね』と池山先生がつぶやかれたのが機縁となつて、突然求道開法の人と転ぜられて六十四歳で念仏往生を遂げられたのである。

又行男さんも昨秋五十四歳の秋に『紅葉せずこのまま散るか散り行くか』と開法生活卅年が無効と知れ、明日の希望も失はれた時、不思議にも念仏の花が開き初められたのであつた。父と子の念仏の御縁の不思議であつた。

養老の鬼頭健三郎さんの開法の縁も尊く有難い極みである。御息の戦死を縁に、奥さんは帰らぬ子の名を独語されるやうになり、せめて自分だけはシツカリせねばならぬ／＼と自分で自分を励ましながらも、又しても崩折れ／＼して、何時起き、何時寝たのか、何を食ひ、何を飲んだのか、さつぱりわからぬといふ朝夕を送られた。

『今日まで仕事道楽で、酒も煙草もたしなまず仕事一途で来たけれど、もう譲る者、受取つてくれる子が無くなつたのだ。』

となると、もう忼く氣力も失つて了うた。希望の火が消えた。かうして御夫婦共に狂うて了ふのかとヘタ／＼となられた時、その暗い胸中に、亡き母堂の教が思ひ浮んだ。『お前にはまだわかるまいが、先立つ者は知識である。何時かはこれが解ることもあらう』

この『先立つ者は知識』の一句が開法の手引きとなつて、自分達はもう老いてゐる。急いで聞かねばならぬ。二つの耳では不足だ。夫婦で聞き、四つの耳で聞かう、と、後生に大事ががかつた由である。

斯くて、別れて悲しみ、会うて喜ぶ境界から、一度会ふて永劫に別離のない、親と子との対面を念仏の心光中に得られたのであつた。

『残水の小魚』も、さしのべられた救ひの御手に『酒濁を知らぬ大河』に解放されるのである。暗く冷たい『洞窟の囚人』が、光明の広海に浮び、心ひろく体ゆたかな世界に転入せしめられる。げに『一大事とはこのこと』である。

耳と

禪は知的、淨は情意的と一般にいふが、一応の話であつて必ずしも斯く決定することはできない。これは勿論である。禪は知的で般若系統に属し淨は情意的で唯識系統に属してゐる。これ又一般論である、大体の分け方である。禪にも情意面がある。一例をとれば一休和尚の書を拝すると人格として情的なものがよく出てゐる。関山国師の書には堂々たる意志と智情円備の香氣に庄せられる感がある。理知的な公案禪の大成者たる白隠禪師の書画を見ると何とも云へない光顔飄々たる感が滲み出てる。その御木像を拝すると眼光炯々たる神威人を庄するところがあるが、あれは弟子の見た一面ともいへる。親鸞聖人の『鏡の御影』を拝すると白隠のそれと同じく人を射るやうな鋭さを感じられる。だから衆生接得の手段の上に禪淨は知と情とに一応分別されるのみで、その人格自体は変らないと思はれてならぬ。禪は知的に空間的に『眼』の面を伝承し主張するから、その影響も手伝つて知的なものとして、例へば語録などでも所謂即非的論理であり不一不異であり事々无碍であ

歌集「断流」より跋

忘却の彼方に去りし幼な日を春曉にわがさめて追ひ居り
今更におのれが無能なげかねど可能の限界見え来し如し
ものなべて移り変りて須臾だにもとどまらざれば日
日新たなり
今年なほ新たに立つる望あれどひそかに思ふ余命いくばく
いたづらに我は死なじと口ぐせに言ひつつ過ぎし我が五十年
求め求めて身に得たるもの更になし求めざる苦に打ちひしがれて

歌集『断流』筑紫野春草氏著。
短歌草原社発行。東京都渋谷区代々木本町七三一。
著者 福岡県吉井町金川九九〇

眼 (二)

柿原徳草

つて、忼き、行として知が現れてくる傾きがある、さういふ宗風である。人間のそのやうな傾向の者の道である。だが又そのためにたとへば白隠禪師の御弟子にも種々の個性をもつた方があつても、知的な面でしか禪は伝つてゐない。東嶺和尚の『無尽燈論』が理知的に白隠禪を伝承してゐても、禪師の絵画に表れてゐる情的なものは文字としては伝へることが困難である。知は人間を毒する、然しその毒薬変じて良薬となる妙も亦、知のうちに具へてゐるから、人間が大事なものを伝へるには知で伝へる方が無難であり堅固である。所が禪はその性質が般若空觀的であるのでその面の弊害も現れてくることにもなる。若し禪が情意的に悟の世界をのこすとすれば詩に依る外ない、詩によつて禪は乱れた、南北朝時代の五山文学と呼ばれる禪は詩に入つてその生命を衰亡の境に追ひ込んでしまつた。やはり禪には知で空で眼で『一無位の真人、汝等面門』より出入す、未だ看ざらんものは看よ看よ』と主流々伝すべき運命がある。

淨は情的であるが、禪と同様に情のみではない。殊に親鸞聖人によつて伝承される浄土の教、その生命を現実に伝えてある念仏は、釈迦牟尼世尊の御いのちをそのまゝに現在に伝へ人類の生命となつてゐる。凡そ仏教で八家九宗と分れてゐても、仏陀生命を現実に生きてゐるのは臨濟禪、その中でも白隠禪と真宗だけであるといえるのではないか。他は大半生命を失つてゐると云つても過言ではない。眼の禪と、耳の真と、白隠禪師と親鸞聖人と、この二仏が日月の如く生命して立つて歩いてゐる。行動の宗教である。まことに偉大なるかなである。面白い言ひ方だが、柳は緑、花は紅である。柱は堅に敷居は横にである。鸞は白く鳥は黒である。両々相待つて人類は大地に両脚を踏んまえて堂々と歩いてゐる壯観である。

聖人の教へは情意的であり『耳』であり『聞』の宗教である。『衆生仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし』これが『聞』といはれる、聖人の仰せである。然し子の母を憶ふが如くにて

衆生仏を憶すれば
現前当来速からず
如来を拝見疑はず

と御和讃に現れてゐる『如来を拝見、疑はず』は知である。又

『議光』と仰せられ、光りの仏に南無したてまつるとの仰せを拝する。私は、いつのことだつたか、なぜ聖人は『南無不可思議光』と第一句に讃仰されなかつたのか、そして第二句をなぜ『帰命无量寿如来』と仰せにならなかつたのかしらん、どちらも南無阿弥陀仏の御徳を讃嘆されるのであるから、前後はどちらでもよいではないか。しかし只単に語調の上からではあり得ない。何か御思召があつての上に相違ない、さう思つてゐたこと多年であつた、心のどこかに引つかゝつて離れないでゐたのであつた。それがいつだつたか、如来の御いのちに温められて『帰命无量寿如来』と正信偈第一句に仏徳を讃嘆せずにはゐられなかつた聖人のお姿を思つたことがあつた。如来の御いのちに温められた聖人は、この食べた味の美味しさとでもいふべき御心を説きほぐしにかゝつたが、それは不可称不可説である。これを第二句に『南無不可思議光』と讃えられたのであるまいか。阿弥陀仏一仏に身温り光りに謝しまつる如くである、聖人の御氣持と御姿が『帰命无量寿如来、南無不可思議光』の二句に眼前に拝するやうではないか。

正信偈はあの通り一句も位置の転換をしてはならない、否絶対に變へてはいけない。あの聖人の筆を下された感情をそのまゝほのかながらも、感じ取るまで、何辺も何辺も拝読すべきである。生活の中に読み込まねばならない。禪

弥陀智願の広海に
凡夫善悪の心水も
帰入しぬれば即ち
大悲心とぞ転ずなる。

の御和讃にも智が現れてゐると拝される。その外、聖人には知の面、『眼』の方面は沢山現れてくる。禪に情がないのでないやうに、真宗にも知がないのでなく、随所にある。たゞ情意的、時間面を主軸として宗を立て、知の面はそれに裏づけられてゐるといへるのである。それは知は人間を固定化し空間化し死屍化してしまふ毒汗が多い、それで、それを現実に身に体して悩み苦しむ現実人間に即して、そこを大地として超えてゆく道が聖人の道である。禪は現実の人間の裏に、仮なるものの裏に真なるもの一真実の人間性を仮想し想定して、そこに行かんとして行証する道である。聖人の宗風にも、だから、知の面を体得した宗風もあれば情の面を体得した宗風もある。何れも機毎々にその人その人に願行は成就されてゐるのであり当然のことである。

然し真宗は情意面を主軸とする、だから、聖人の正信偈の第一句第二句の順序を拝しても、第一句は『帰命无量寿如来』であつて、如来の御生命、寿命無量の如来さまに帰命されるのであらうと拝する。そして第二句に『南無不可思

の句でも、語でも、古聖がそのやうに腹の内を表詮せずにはゐられない、さうしか言へない、ぎり／＼の所が出てゐるとのことである。例へば『身心脱落、脱落身心』と表詮された道元禪師の句に参ずるには、そのまゝが、そのまゝで腹にすはるまで参すべきで、この句を前後顛倒してはならぬのである。池山先師の語に『南無阿弥陀仏でもよい、ではない、南無阿弥陀仏でなくちや不可ないのである』といふのがある。これに限るとか、これでもよいとか、これと同じだとか、すべて皆非であつて寒山和尚の詩ではないが『只是是是』である。絶対である、それ以外は皆非であるところ古今を絶した十方に妙なる祖意が味倒されるのである。もし新しい言表をするならば、先づ古語に徹し祖意に信順して、身に体しそれをわがものにして、そこから口を衝いて出てこなくてはならぬ、頭の中で誦読したり意識したりしてみても、それは似てもつかぬ顛倒の妄見であり、雪を担つて井を埋むるの愚挙となつてしまふのである。

歎異抄 第十章の『念仏には無義を以て義となす、不可称不可説不可思議の故に』との聖人の仰せも悲智円満の南無阿弥陀仏の生命の光りほとけに遭うたからには、その解釈説明は百千俱低の舌をもつても、その舌ごとに無量の声をもつても説き尽くされない、即ち、念仏は南無阿弥陀仏である、味はひである、仏の御命に私のいのちが

ふきかへつてくる、何とも言表できぬ、言忘慮絶であり得魚忘筌の境を不可称、不可説、不可思議、即ち南无阿弥陀仏と現したものと拝するのである。南无阿弥陀仏は甘露の味なのである。壽命無量寿如来、南无不可思議光、まことに南无阿弥陀仏々々々々と、念仏申すべきものなりである。

○いのちなき砂のかなしさよ　さらさらと
握れば指の間より落つ

○何となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下りしに
行くところなし

○大といふ字を百あまりかきて

死ぬことをやめてかへりに来けり

(以上　啄木)

情熱の哀唱詩人石川啄木のこの歎声、虚無、彷徨の旅に、南无阿弥陀仏の御命を与へてやりたかつた、なぜ啄木はお念仏が申されなかつたのだらう。しかし私のある時も啄木の胸に顔当て、同じ悲しさに泣いた事がある。嗚呼！まことに、不可思議の本誓により名号仏事を私の身の上になして下さる。たゞたゞ私の遠き宿縁を大悲の善巧に謝す外はない。

仏が仏では私は助からぬ、私が徳草といふ個有名詞がある如く、仏にもこの仏といふ名がなくては何のゆかりも私用を發揮可能ならしめるものは、耳の常恒に開かれてあるによることの、いくらかでも諒解し得るよすがともならば、と自ら慰める次第である。

弥勒附属の一声一念は即ち南无阿弥陀仏なること、聖人

病室のベッドに臥して

わが人生を憶ふ

松村繁雄

不図眼が覚めると、絹のやうな朝の太陽がベッドの上まで射し込んで来た。十月三日の朝である。私は何かしら涙が出てしやうがなく、幸ひ他に誰も居ないので今朝は思ふ存分泣いて見たいやうな心地になった。

私は今、十二指腸潰瘍の手術を受くべく此の日赤病院のベッドの上に臥してゐるのである。手術は苦しいものと聞いて、昨日までは「あゝ厭だなあ」といふ気持が一つぱいであつたのだが、——今とてもその思ひがまんざら無いといふ訳でもないけれど、——さて愈々病室に入り込んで見

にはない。しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の徳草を救はんために、響の声に応ずる如く南无阿弥陀仏と名号をもつて安養界に応現され、迦耶城に彰現され、聖人と化して下さつた。函あれど蓋なきに苦しむ私に、函蓋相応し機法一体の南无阿弥陀仏と成りおほせて下さつた、有難しといふもなほおろかである。これでこそ具体的に現実に、眞実に私は『生命をもつ砂』となることができる、汽車を下りて行く所がある身である。

西方に浄土をしつらへ、弥陀仏と仏身を現し給ふ南无阿弥陀仏の仏身仏土こそ、この土の私の穢身穢土に影の形に副ふ如く、表裏一体である。

『南山に鼓を打てば、北山に舞ふ』。

阿弥陀仏、十劫の昔より南山に鼓を打つこと久し。遅れ走せながら鼓の音に『耳』が向いて、それをそれと聞かしめられて、遂に鼓に合はせて舞ふ姿の、いかにのどけきことであるか。しかし、舞ひつゝ瞳るその瞳には、有難さ、かたじけなさ、頼もしさ、の涙は光り、頬に伝ふのである。生ける阿弥陀仏、生ける聖人、それは私が生きてゐることである。

耳と眼について、耳の永遠に開かれてある所以は、阿弥陀仏の御いのちの通入せんためなることを述べようと思つて、言葉は乱れ筆は迂路に走つたが然し眼の開閉自在の妙の御自督の語である。つまり南无阿弥陀仏が常恒に開展して未来永劫にいたるまで息まないところに、大悲の願船に乗ずる至徳の温かさ、光明の広海に浮ぶ衆福波転の明かさが身嘗味到されるのである。

(三一、三)

るとさすがに「病人」といふ自覚も出来、不安も危惧も乗り越えて、たゞ有り難さ添けなさに涙のにじみ出る私にさせられてしまった。是は実は我ながら不思議な事であつて、この気持ちは言ひ表はさうにも言葉がなく、たゞお念仏申すより外に方法が無いのである。

この慶び、是は私のものであつて実は私のものでは無いのである。私のものでないといふ意味は、私の意志で拵へたものでなく、恵まれたもの、戴いたものといふ意味である。思へば、人間にはこのやうな「慶ばせられる」大きな

世界があるのだが、普通はそれを知らないまゝであるのである。今気付かせられて見ると、是は私一人が私するに忍びない、何とかして世の人々にこの慶びを頒たねばならぬ、然しながら、是を誰にも解つていたゞけるやうに言ひ表はすことはなかなか容易でない。無いけれども黙つてはゐられない。以下ペンの趣くまゝに私は是を書きつけて見ようと思ふ。

私は今迄人生は苦しいものとはかり思つてゐた。思ふやうにならぬ世界だとはかり考へてゐた。それは間違ひではなかつた、慥にこの世界は思ふやうにならぬ世界であり苦しみの人生ではあつた。然し、それはあまりにもわが足元の暗いかげばかりを見詰め過ぎて、眼をあけてみ空の光を眺める事を忘れてゐたのであつた。今眼が覚めて見ると光はわたしを包んでゐた。包んでゐるといふよりも、私は深い恵みの中に生かされてゐた。あまりにも恵まれ過ぎてゐるわたしであつた。その恵まれてゐる事を知らずに不平に過ごし、グチに送つた過去の六十年といふものは誠に以つて勿体ない事であつた。

私は今六十才になるのだが、六十といへば父の往生した年である。私の往生の日もあまり遠くはないやうな気がする。人生は五十年といふのに、私は既に六十といふ今日の命を賜つてゐるのである。是には何かの意義が無ければ

み恵みによつて生かされるのだ」と口では言つても、そのみ恵みはわがチユで感得するのだとはかり思つてゐた。ところがそれは大間違ひであつて、私の凡智で感得出来るやうな小さいみ恵みではなかつた。私はみ恵の、計り知る事の出来ない深いみ恵みに生かされてゐるのであつた。あまりの尊さに泣かしめられる今朝のこの涙も私の涙ではなくして、み仏より賜はる涙であつた。それを知らないで、わがチユ、わが力で生きるごと考へてゐた過去の六十年といふものはまことに手探りの人生であつた。

気がついて見れば、世の中のすべての物！一木一草に到るまで私を生かしてくれるみ恵みならざるものは無いではないか。今朝病棟婦さんが運んできた朝の食膳一つを考へて見ても、お米の命が、野菜の命が、魚類の命が、さては執る箸の竹までが私のために命を捧げて私の命を護つてくれてゐるではないか。然るに、それは知らずに思はずにただ貪り喰うた過去の六十年といふものはアノ豚と撰ぶところは無かつたではないか。

よくよく考へて見れば、窓辺に咲いてゐるアノ百日紅の一本も此の私のためにあるではないか。此の病院も私のために建てられ、此の病室も私のために設けられ、さては院長先生をはじめとして、甲斐々々しく立ち付き給ふ白衣の看護婦の皆さんも、何れも何れも私のためにあるのではないか。然るにその重大な事は忘れて、すべてを只貨幣によ

相済むまいが、私はあまりにも煩惱の虜になり過ぎてゐた。もとより煩惱の塊りの私であるのだから煩惱を捨てる方法はないのであるけれども、さればとて煩惱だけで生きたのではたとへ百年の命を得たとしてもそれは一つの動物に過ぎない事になる。光りに遇うて、御恩の中と解らして貰うてこそ、六十年の命を得た事にはじめて意義が生ずるといふものである。

私は次の月曜日を期して開腹手術を受けるのである。それは、この私をして尚暫らく此土に滞留せしめようとするみ仏の思召に外ならない。静に考へて見ると、開腹といふ事は私の身に起つた問題ではあるけれども、そのためにはどれだけの多くの人々に御厄介を掛ける事か分らない。妻に對しても息子に對しても申しやうのない迷惑を掛ける事である。況んや社会のあらゆる方々に計り知れない御厄介を掛ける事になるのだが、それを敢えてして尚且つ私を此土に留めしめ給ふのは何故であらうか。たゞ慾をするため、グチを繰り返へすためだけならば腹を切つてまで生きる必要は無いやうに思はれる。然らば、その目的は何であらうか？ 私をして、光る世界を、慈悲の世界を、慶ばしてやうためのみ仏の思召に外ならぬではないか。

私は今まで長い間大変な錯覚を起してゐた。私は私の力で生きるとばかり思つてゐた。「いゝえさうではない、

つて取引しようとするやうな生活の在り方は、人間の価値も亦一片の貨幣に成り下つてゐるではないか。然し此のやうな物の見方は今頃の世の中に於ては単なる思籠主義の思想として閉却され敢て関心を呼ばないであらうけれども、何は兎もあれ今気付かせられて見れば、世の中の一事一物がコノ私のために、コノ私を育んでくれるものならざるものは無いではないか。

今図らずもベッドの上に伏し、開腹の苦しみに当面してゐる私であるけれども、若しこの苦しみに当面しなかつたとしたら、今朝私にコノ慶びはあり得なかつたではないか。若しコノ慶びが無つたら私は恵みを忘れてコノ一日を過す事になるのだが、恵みを知らなければたとへ百才の壽命を得ようともそれは久遠の闇であり、猿の一生と更に変わるところは無いことになる。猿には喰ふよろこびはあつても永遠のよろこびはあり得ないのである。

私はかくの如くして助けられるのである。今病を得て、又もお慈悲の世界に、み仏の命の世界に帰らしめられるのである。其処は、今日はあつても明日は滅びるやうな世界ではなく、寸前の享樂に夢中になつて人生を忘れるやうな世界でなく、永遠に輝いて変る事無き明るい広いみ仏のマコトの世界であり、私は忘れても忘れさせ給はぬ仏の悲心の躍動し給う世界である。

開腹の結果がどうであらうとそれは私の計り知る処でない。さういふ事は今日の科学にお任せすればよいのである。万一、その科学によつて我が寿命が延ばし得られなかつたとしてもそれは科学の責任でもなく又私の責任でもない。私はそれでよいのである。わが人生の目的は久遠の親心に遇うて、久遠のマコトをよろこばしていただくその一事に尽きてゐるのであるから、今日は今日だけみ恵みを慶ばしていただければ事は足りる。若し幸に更に暫らくの寿命を賜はるとしたら、それはそれだけコノ土に於てみ恵みを慶ばしていただくことであらう。

噫、のどかなる世界かな、広い豊かな世界かな、一体斯くの如き世界がどうして私のものになつたのか？ 考へて見れば一つとして私のチエでは無かつた。深い仏願のマコトによつて遂に私の上にひらけて下さつた。まことに「たまたま」行信を得ば遠く宿縁を慶べ、コノ私に今日コノ慶びを与へ給ふまでには、一体どれだけの善智識の御苦労がましました事か。然るに、愚な私は、それをそれとは知らずしてわがチエわが力のごとく思ひ違ひをしてゐるのである。其処にも飽くなき自力の迷蒙がのさばり返してゐるのである。

育まれてゐながら育まれてゐる事を知らない世界は無限の闇の地獄である、今み仏の深いみ恵みに抱かれて無明の闇の夜が明けて見ると、一切の事が我を育て給ふ仏願の我流にのみ生きて来た今日の懈怠の姿である。私には此の負債を返さねばならぬ責任があるのである。

というて、コノ三毒の煩惱に固つてゐる私に負債を返し得る能力があるといふのではないけれど、その能力無き私のために十劫かけて憐れませ給ふみ仏の深きマコトに今遇ひまつて見れば、私にはもう少し慶ばして貰ふべき仕事が残つてゐるやうな気がする。慶ぶとは何か、それは念仏申させて貰ふ事である。若し此上一日の命を賜るならば一日だけ、二日の命を賜るならば二日だけ念仏申させて貰ふ、それが明日からの私のたゞ一つの仕事であるやうに思はれる。

省れば、青年だ壮年だと野望に胸を躍らせたのはツイ昨日のやうに思ふのに、人は私を捉へて「おぢいさん」と呼ぶ、お爺さんといふ意味は「老人」といふ意味であらうが、さて、「老人」とは一体どういふものであらうか、西の山端に残つてゐる弦月のやうにいまに隠れるもの、地面に散つた花びらのやうに「若さ」といふ人生の花を咲き終へた残骸といふやうな意味のものであつてよからうか。私は今「老人」となつてはじめて人生の本統の華を知るのである、いや知らしめられるのである。私は、私と同じやうな天下の「老人」達とこの慶びを共にしたいのである。

のお働きならざるものはないのである。今は明日の開腹を待つてゐる私であるのだが、さて考へて見ると、第一に科学があつて私の病気を護つてくれ、第二に社会があつて私の身を受け入れてくれ、第三に家庭があつて私の苦悩に最大の激励と慰安を惜しまないでくれる、等々列挙すれば私の蒙つてゐる御恩といふものは逆も計り知り得るものではない。

思へば、曾ては「不幸」として悲んだ過去の出来事も、今大悲の大願海に浮ばせられて見れば何れも何れも私をして今日あらしめるための御方便でなかつたものはないのである。今此のやうな事を言ふと、此処でも又恩寵主義の思想として人は軽蔑するかも知れないが、然しながら、今あか／＼と久遠の光に救はれて見れば、若しあの悲しみがなかつたら逆も今日、この慶びを知らう筈もなかつた私である事が思はれる。

さても嬉しい事かな、既に六十といふ余命を得、且つこの慶びを賜はる。更に今又医学の恩寵を蒙つて尚暫らくの延命を賜はらうとしてゐる。然し、只喰うて生きるだけの延命なら犬も猫も同じになる、是処には深い理由がなければならぬ、つらつら考へて見ると私は大いなる負債を背負うてゐる。その負債を返さないまゝで此世を立つといふ事は忍び難い悲しい事ではなければならぬ。負債とは何か。感

陽はだん／＼登つて空は青々と晴れ、みのりの秋を思はせ、我家で取り入れに汗まみれになつてゐるであらう息子の顔が嫁の姿が眼前に浮んで来る。此のやうな厄介な私を、負債を背負うてゐる私をいつも「父よ」と呼んで護つてくれる息子である嫁である。私は何かしら拜まずにはゐられない、今拜ませられて、はじめて人の世の華を知らしめられるのである。愛愍の情は渾りなく、いかに懐かしく思うてもやがては別れ行く身の淋しさといふものは制へようもないのだが、然し仮りに明日の手術台が絞首台であつたとしても、この慶びを以つて死んで行く事の出来る私にして下さつた仏恩の不思議さに、私はたゞ合掌念仏するより外には方法がないのである。思へば、この念仏も又み仏より賜はるものではないか。噫、

昭和三十一年十月三日稿す。

成徳院光沢抄・跋

我身が悪いと思つてゐるだけなら機の深信ではない。その裏に善くしたいと云ふ心があるから。機の深信とは、我心は善くならぬ、役に立たぬと、我心を見限ることで、法が知れねば機も知られない。両者共に仏様に知らせて貰ふのである。

編集後記

春乾坤にめぐり来て、仏誕生の四月となりました。それにつけ、菅瀨芳英師の手筆法語に

「私が痛になつて入院して以来、気の毒ぢやと云つて毎日沢山の人が見舞つて下さるが、実は私よりも気の毒な方が沢山にある。不治の難病にかかつた私が死ぬるのはあたりまへだが、思つてゐる私ばかりが死ぬる様に思つてゐると大間違ひである。私はさういふ人が気の毒でならない。後生の一大事は油断から仕損ずると蓮師も仰せられてゐる。油断大敵ぢや。南無阿仏、々々、々々」

又同法語のなかに
「達者な人も死す。病人も死す。子供も死す。此世の人は、めめて皆死ぬに。けれども御互は御本願に乗托して居るものは、日々生き／＼して御念仏を相續し、浄土に往生さして貰ふので、眞の生命を得てゐるのである」
「健康な人御見舞甲候。御用心々々々。仏法は油断にてしそんずるぞ」
前念命終、後念即生、即得不退と毎日生き／＼して大願の船に乗托せられた師の「一大事、油断するな」の御勧めが深く身にしむことであります。

△耳と眼の榊原さんの原稿有難く拝読しました。特に東本願寺派の末寺に生れられ、縁あつて只今の禅宗系の浄住寺に任せられ、一途にその道を求められた末、念仏に安住せられたので、「禅と念仏」は榊原さんのお生命がけの身証であります。禅と念仏を前にならば見物人の立場で論ぜられたものではありません。

京都市右京区山田開町浄住寺。
△わが人生を想ふの稿は、昨秋大手術を前に誌されたもので万一の時は唯一の遺稿になつたかもしれない記念のものであります。只今は立派に恢復せられピチ／＼と活動されてゐます。

山口県仁保局、大内町仁保。
△一大事といふこと。鷹揚に仏法を聞くことを蓮師は度々いしましめられてゐますが、一大事といふことも唯大切なこと重要なこと、急がねばならぬこと位に取つて居りました、これこそ一大事であります。

一とは唯一無二。大とは絶対無上。相對虚仮の人生に、絶対眞実の光明があらはれて、破壊と建設が同時に現前して、往生が一大事と知らされる。そこで、病むものが達者なものを憐むといふ菅瀨師の法味もあらはれるのであります。

先月号の「奄美郡島の開教」の筆者、長峯崇仁師は、鹿兒島県大島郡亀津町、奄美東本願寺に駐在して居られます。聚墨生

御案内

第一、二、三日曜日午後一時半、一道会館日曜講話。
第一日曜、午後六時半、中区葵町法善寺、輪読会
十三日午前午後、熱田区幡野町願入寺法話会
廿四日午前午後、昭和区小桜町教西寺法話会

定価 一部 十七円(送共)
半年 百円(送共)
一年 二百円(送共)
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人 花田 正夫
印刷人 奥川 正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第九卷第二号昭和三十三年四月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可